

## 魯文の逸文

高木 元

大妻女子大学文学部

キーワード：仮名垣魯文、十九世紀文学史、鈍亭魯文

## 抄録

仮名垣魯文に関する研究は、伝記研究と、所謂文学（小説）の研究を中心に進められてきた。しかし、魯文の文業は所詮文学とは見做されなかつた雑文が大量に遺されており、彼の仕事の全貌を明らかにするためには、これら非文学的なテキストの調査蒐集は不可避の基礎研究である。結果的に、近世と近代とを明治維新で分断して記述されてきた日本文学史を、十九世紀という括りで通史的に記述するため資するはずである。

本研究の最終的な目的は、明治維新という政治経済構造の変革に則して近世と近代とに分断して記述されてきた日本文学史を、十九世紀という時間的枠組みに拠って通史的に記述し直すことにある。その際注目すべき戯作者として仮名垣魯文を取り上げる。魯文の研究は、その伝記研究と、〈近代文学〉の濫觴として『安愚楽鍋』『西洋道中膝栗毛』など小説に集中してきた。しかし、魯文が書き遺したテキストは、従来の価値観に拠れば文学と呼ぶには憚られる雑文が圧倒的に多く、それらは蒐集の困難さと相俟って長く等閑に付されてきた。しかし、魯文の文業の全貌を明らかにするために、延いては十九世紀文学史を記述するためには、遺された非文学的営為の網羅的な蒐集と整理とが

不可欠である。

そこで、既に多くが散佚してしまつたと思われる魯文の言説ではあるが、可能な限りの調査と収集整理を継続することに拠って、その生涯にわたる著述活動の様相を総合的に明らかにし、その史的位置付けを試みたい。

さて、魯文は、当時の戯作者たちと同様に、作家というよりは雑家あるいは売文家として捉えることが可能である。魯文の遺した仕事は実に多岐に渉り、切附本（安政期の鈍亭時代を主として粗製濫造されたダイシユキト抄出本）、艶本（慕々山人などの筆名で書かれた習作でパロディ改変作が多い）、合巻（抄録もの、短編、長編続物、明治期草双紙など）、時事（瓦版や、疫病災害のルポ

ルタージュ『安政見聞誌』など）、浮世絵の填詞（揃物が多いが興行案内引札風のもの異国ものなど）、端唄や都々逸本（歌澤節が多いようであるが、俗曲集の編著）、絵手本や画譜（多くの序跋を執筆している）、報条・引札（大多数が散佚、貼込帖などに残存する）、滑稽本（『西洋道中膝栗毛』『安愚楽鍋』など）、近代風俗本（花柳本や割烹案内などの序跋）、その他（新聞記事〈雑報〉、俳諧、狂歌など）と分類することが出来る。

これらのうち、抄録本は魯文の文業中でも看過できない量を占めており、と同時に長編作の抄出などは誰でも出来る仕事だとも考えられないので、魯文の文業として一定の評価が可能だと思われる。しかし、問題は自作以外の雑書に供せられた序跋類である。明治期の活字本にも序を書いている。中でも多いのが音曲関係の本で数多くの筆の跡が見られる。また、報条・引札に記された広告文も、明治期の美文集などに転載されていることから、凝った戯文として見れば、それなりの意義が存したことが分かる。

さらには調査が及んでいないが新聞記事や俳諧、狂歌などに至るまで、多くの雑書に遺されている筆の跡を辿ることも、魯文研究にとって（社会的研究としても）不可欠の作業であると言い得よう。

しかし、斯様な落穂拾いは決して楽な作業ではない。多くの場合、著编者や画工板元名以外の人名が書誌データとしてデータベース化されておらず、愚直に片端からそれらしい本を繕いて見る以外に、発見するための術がないからである。浮世絵なども画像公開が進んでいるが、浮世絵師の仕事として絵画として扱われるためか、書誌データに詞者名が記録されることは滅多になく、これまた愚直に一点ずつ確認する必要がある。

なお、偶然ではあるが、都立中央図書館の加賀文庫に所蔵される『鶏

助雑箋』という大部の貼込帖スクラップブックを見出した。これは加賀豊三郎氏が幕末から昭和期に渉る多岐の紙資料を蒐集編纂した物で、全三〇冊に加えて、別冊二冊、さらには別集十一冊が残されている。これを丹念に調査したところ、既知の資料を除いて新たに十四点の未知の報条を見出すことが出来たので、これらは三月末刊行された『大妻国文』五三号で報告紹介しておいた。

以下、本稿では調査研究報告の一端として、今年度入手した資料や管見に及んだ資料から、その一部を紹介しておきたい。ただし、未だ不完全な断片に過ぎないので、多々存するであろう不行き届きについて、大方の御教示を伏して庶幾うものである。

#### 〔新吉原細見〕（製版、和装、中本一冊、万延元年、玉屋山三郎蔵版）

蜀山阿房に三千人の揚結ハ。始皇が半世の快樂にして。邯鄲旅亭に五十年の居續ハ蘆生が一時の栄花にこそ。されバ中華の娼妓に傾國の容色あれども。高尾薄雲の立引なく。傾城の賢なるハ此柳巷花街。張と意氣地ハ本邦の姫氏國。豊蘆原の中津國を。この吉原の仲之町五ツの街一廓に。縮めた壺中の別世界。根源情の味事ハ。通ふ神代のむかしから。今も替らぬ意氣も浮はしの通ひ路に佳美婦を得んとおもはゞ稲負鳥その跡の。文字に列す君達名寄それハ三鳥傳授の一箇これハ五町の細見記枝折の冊をみつ布團。閨房の諸分の深秘と口決ハ余も紫蘭の室に入て自ら其香を知り給へ

蔓延紀元庚申孟秋

〔玉出〕

〔甲八改〕

假名垣魯文記 〔文蔵〕

※『吉原細見年表』（日本書誌学大系七二、青裳堂書店、一九九六）に拠れば、

大東急記念文庫本、東京大学総合図書館本は、序文や改印「申八改」（万延元年八月）だが、序末は「萬延二年辛酉之春」とある。なお、「鈍亭」魯文が「仮名垣」を用い始めるのは万延元年以降である。

江湖機關西洋鑑うきよかくりせいようのかね 初編（製版、和装、中本二冊、明治六年、萬笈閣梓）

江湖機關西洋鑑初編序

我輩戮力の土方に備れ。泰山の底を穿ちて。前世界の枯骨を顕し。紀元前の古きを温て。毎日新聞に備へんとす。夫流行の變換ハ。最初取立の開闢より。終に交際の段に至り。銅版の画圖明細に寫し。歴史家の演舌時に隨ひ。此機關の糸を引て。西洋目鏡の變化をしらしめ贈答の合述。相互に句を次ぎ編を嗣で。發端一部に貴眼に止れば。前看官ハ是で御交代

横濱楓橋下の新居に

神奈垣魯文謾題「善悪」

※外題『浮世機關西洋鑑 初編 上』。見返「訓蒙」窮理隱語／清原道彦著／猩々曉齋画／初編二冊／萬笈閣梓。魯文序の次に「自叙／明治六年第十月 岡丈紀述「印」。内題「江湖機關西洋鑑初編上（下）」／横濱 岡丈紀著述・神奈垣魯文校合。序題、内題の「江湖」は入木。国会本は上下揃いの早印。見返「浮世機關西洋鑑／岡丈紀編／猩々曉齋画／第初編／萬笈閣發兌梓」。序の背景下部に街の風景を水色摺、口絵にも水色、緑色、黄土色、肌色、薄墨の重摺りが施されている。各節は『安愚楽鍋』と同様に話者の独白体で、開化期の世相を諷刺する滑稽本。

眞篤苺信濃美談みすゝかるしなのびだん（和装、活版、中本上下巻合一冊）

眞篤苺信濃美談序言「猫痴」

民八國の本なり民富て國貧しきハあらず抑國君の大幹なるも民庶枝葉の力を得されバ焉乎能く茂樹の繁盛を見む民を撫ること君にあり國を保こと民にあり故に官民の權衡相比して富國強兵全かるを上は下を陵虐し苛政民を害ふときんば枝葉大幹を乖離して國土衰ふ此理蓋し地球上一圓の通義にして古今不變の道と雖も然るも我從前の民心專制の下に坐し其奴隸に甘んじ卑屈に慣會て天賦の自由を活動するを惟はず唯に尊皇の意に厚きも却つて愛國の情に疎く國民同胞の爲に自ら欲する所を演ず其不可とする所も唯々諾々之命隨ふ者とし所謂啼兒と地頭の俚言に安んじ抽出て擅斷苛酷に抗し其弊害を掃攘するの氣力に乏し民權百家傳に曰今夫代議の政論を唱へ民權の主義するは字義名稱こそ新なれ其意東西古今の別なし云々と羅馬古代のブラタスバブリアスの如き共に民權家の巨擘にして事は西洋紀元前にあり爾後紀元一千三百年代の初め英国ウキリアムラングトンの両俊傑あり剛毅材幹共に國民の爲に奮勵して竟に英國の富強方今の位置に到る遺業を當初に興せるや蓋し愛國の嚆矢といはざるを得ず大小相異なるも身を殺し仁を成すが如き我下總州の細民佐倉惣五郎即ち是なり之に相繼の義民信濃に起り憂苦艱難膽を嘗一死を畏れず憤然義舉して如終撓まず遂に吾人民心の結果を得たる其事蹟歴然として口碑に傳ふ今又更に刊行し以て不朽に唾んとす渡邊文京此が操觚に任じ全部稿成るを以て余に序言を需む田毎の鏡月明々として民權の皎々たるに反射するや信陽の名勝其第

一に算ふも可也以て巻端に題す

于時明治十五年十一月廿八日東京いろは新聞京文社の長老

玩佛居士京橋區本材木町第三坊の草廬佛骨庵の南窓に採毫

假名垣魯文卒記

(假名垣)「魯文」

※『(嘉助全傳)眞篤苜信濃美談』初編、東京 假名垣魯文校閱・竹内泰信編輯、慶林堂。巻末広告「(松本書林)慶林堂高美慶藏梓書籍概表」松本南深志町舊本町二街 慶林堂\信濃書林 高美甚左衛門」。刊記「明治十五年十二年五日出版御届、明治十六年一月 刻成出版\編輯人 長野縣平民 竹内泰信、全縣下南安曇郡高家村百五番地\出版人 全縣平民 高美甚左衛門、全縣下東筑摩郡南深志町二百七十六番地\大賣捌所 東京馬喰町二丁目 木村文三郎、全横山町三丁目 辻岡文助\印刷 全神田五軒町 小笠原活版所\ (定價升錢) (高美檢証)」。初編口絵中に「竹葉筆」。二編末に三編予告存。貞享三年に信濃国松本藩に起こった百姓一揆の中心人物である多田嘉助を顕彰する義民伝。

**都名所画譜** みやこめいしよぐわふ 初編 (和装、製版、中本一冊、朝香樓芳春画)

都名所画譜初編之叙

萬物形象あり形象といへば則画なり其画の徳たる一字不通の徒も是を披閱て其物なるを知るに至る故に年歳画の道行れて梓刻の画帙多かる中に此一冊史ハ余カ友人一楊齋主人遠境に杖をあはせ走見わたせば柳櫻を混ませてと和歌に詠りし都の勝地を矢立の筆に記しけるを書肆いつの暇にか探知りけん紙魚の住家を

訪て懇に板下を乞ひ求め梓の花を咲せつゝ美屋古名所画譜と題するは彼下の句と画名に因む春の錦の意にや有けむかし

慶應丙寅\孟春

應需 假名垣魯文誌

※外題『都名所画譜 初編』。見返「都名所画譜 初編」。刊記「大阪書籍老舗心齋橋筋南久寶寺町四丁目 前川善兵衛」(京大本刊記「三都書肆 京寺町通佛光寺 角 河内屋藤四郎\大坂心齋橋通博芳町 河内屋茂兵衛\同通本町角 河内屋藤兵衛\江戸馬喰町二丁目 山口屋藤兵衛\同本石町十軒店角 椀屋喜兵衛」)

俳優評判記 (明治十一年十月狂言) (第一號) (和装、活版、中本横本一冊)

新富座俳優評判記 初編序詞

演劇ハ活歴史俳優ハ教導職の一部分と大業にいふに野暮なり其活歴史も節穴連の觀に觸てハ一部の趣向と一座の俳優を混淆視にして衣裳の花華と俳優の門閥に驚怖かされイヨ日本一大黒柱と七里霧中に喝采る者ハ此演劇にして此役ありと其任を見て劇法を解ことを能はず此役ありと其任を見て劇法を解ことを能はず此が爲に演劇を一の花柳巷に比し俳優をして艶治郎に類する者とす者とす過れるも亦甚太しからずや昔年支那春色臺の猥風を我邦に傳へしより衆目其觀の正的を失衆視の眸華美に流れ三府の評者少しく其當を得たる者僅かに浪華に八文字屋自笑ある而已此人や一歳三卷の評冊を著し以て三府の俳優が扮旦の可否を論ず然るも同氏ハ浪華に在て而して東都の俳優を評するに至りてハ知音の傳聞に因るが爲に所謂靴を隔てゝ痒きを堪へ簾を隔てゝ物いふが如きを遁かれず且人文舎の家流三世にして止みた

るを同地の同好同志を看認る者ハ其投票を乞ひて以て多數に歸す之を劇會と稱せんか此書の成れる議案議決の公平を旨とし僻眷顧の私情なく脚色を魂とし俳優を體とす夫可ならん哉可ならんや序して江湖の評家に問ふ

明治十一年十二月 三世自笑の筆統 假名垣魯文誌

※伝統的な劇書に做つた黒表紙。刊記「明治十二年三月廿四日、出版御届濟、編輯兼出版人 日本橋區堀江町二丁目二番地平民 植木林之助、印刷 京橋區出雲町四番地 假名讀新聞社」。

### 俳優評判記 第十九號 (和装、活版、中本横本一冊)

#### 俳優評判記 第十九編序詞

穴の穴を穿ちて泥の泥を掴み出すとハ風來山人の舊言にと劇場ハ好め狂言を論するなどハ香以居士の通言なり然共食して佳きと不味をいはねバ調理人の巧拙を分たぬ類ひ張合なきに等し可しされバ俳優も舞臺の善惡佳しまづいを評るゝが各自の藝事の勵み到底出世の棧しなればさのみ敵役にさいなまるゝとハ思はさせらまし素より一身の藝衆目に觸る舞臺業敵ハ大勢味方はひとり頼む同業の忌敵き皮肉社會の劇場世界愛顧に寄るの他に術なく自得の業と演て見せても土地替れバ品位替る浪花のありしも善と看做せばハテ儘成らぬ浮世じやなアと獨吟の述懐より此中庸をとりが鳴東京の者も京坂演劇見分る功者の六二連も前に發行の十八編ハ弘法も筆の誤り見立違ひの國手の診察再び醫案を旋らして當編全治の功を奏せり看客その氣で御覽あれかし

明治十六年四月初旬

新富市隱 猫々道人記述

※黒表紙。魯文序の次に「于時三月晦日の夜陰いろは新聞校正の餘暇、孤蝶園わか菜艸稿」存。刊記「明治十六年四月 日」出版御届、(編輯兼出版人) (團扇蜜柑) 間屋 植木林之助」。

なお、黒木文庫(東京大学教養学部国文・漢文学部会所蔵)に一(二十七)うち四、六、二十、二十一、二十五、二十六欠が所蔵されており、そのうち二、三、五、八、九、十二、十六、十八、十九、二十二號に魯文の序(明治十一年)が載る。

### 〈江の島鎌倉〉名勝巡覧全 (洋装、活版、一冊)

#### 名所古跡序詞

汽車の煙り世に立登らず人車の運び路に輾らぬ昔日の大江戸と稱し頃ハ深窓の内に成長り旅の葉いざ知らぬ小女等が遊山のきわめと希望めるハ先江の島の濱邊をたどり岸の干潟に數々の貝拾ふ業七里が濱の磯邊を傳ひ薪樵る鎌倉山に名所古跡を尋るを快樂の限とせり船車の便利可也と雖ども路芝の青きを踏海原の廣きを眺め杖にイみて言の葉の花を咲かし徐々に歩を進め寛緩に宿りに着く程浩然の氣を養ふのすさみ有可きやハ乍麼江の島と鎌倉の兩名所ハ相模の國の眼とも謂ツべき眺望無二の佳境にて殊に江の島の絶景なる纔かに海中の孤島に屬せど天然涌出の奇蹟辨財天女降臨の靈地なるハ遠き異國の果にも傳へ代々の詩歌にも之を讚し遠近の詣人常に往來し其かみ鴨の長明も此名

所ろに詣で来て

江の島やさして汐路にあと垂る神の誓ひの深きなるべし又鎌倉の八ツ七郷十井十橋七の切通し五水の名泉今に乾ず夏草やつは者共が夢の跡とはせをの翁が行脚の吟に七百とせの昔も忍ばれ感情その場所に起り哀れになつかしき舊跡の導きとて今回彼島に年久く住める蛭子屋の主個が發起てこの雑誌を綴り設け磯貝拾ふ小女男兒が葉となすとなん聞へし依てその簡端に思ひ出る言種を漫に記す

明治十六年七月

東京市隠 假名垣魯文

※内題「江ノ島鎌倉 名所古跡」。外題に「寿老仙人編輯／法木書屋」。刊記「明治十六年七月九日御届／同七月出版／定價金三拾錢／編輯兼出版人 東京府平民 法木徳兵衛 日本橋區元大坂町十一番地／發兌人 永野茂八 神奈川県下相模國江ノ島」。

本書は名所案内風の「地誌」であるが、様々な文献を引用した近世期の考証隨筆を継承した風でもある。序文に拠れば「彼島に年久く住める蛭子屋の主個が發起てこの雑誌を綴り設け」とあるが、表紙と見返にある「編者 寿老仙人」が何者であるかは不明である。

〈鳥追於松〉海上新話全 (洋装、活版、一冊)

我假名讀新聞第五百四十號客歲十二月十日を以て始めて雜報欄内に記載せし鳥追阿松の傳ハ間々本年一月十一日第五百六十二號に到り嗣出する事十四回未だ結局に及ばざるも僥倖にして千町万町の衆目に觸れ喝采の聲價を得たる操觚者の歡喜の剩りに

思はず筆を走たるなり然りと雖も春霞三筋を繋ぐ長物語ハ頗る新紙の本意に違へバ其概略を次號に掲げ大團圓となさんと欲すを錦榮堂の主人遺憾として乞ふて其首尾を全くせんとす原由ハ遙かに過去し明治元年の春よりして同十年の冬に止る温故知新の大實録題して海上新話と號け茲に三絃の緒を解くと云

明治十一年第一月

假名垣魯文記

※活版翻刻本。外題に「金泉堂梓」。内題「鳥追阿松海上新話」。刊記「明治十九年十月十九日翻刻御届／全年十二月 出版／(定價金三拾錢)／原 版人 大倉孫兵衛 日本橋區通壹丁目十九番地／翻刻出版人 東京府平民 鈴木金次郎 日本橋區通壹丁目壹番地／印刷 常磐木活版所 日本橋區本石町壹丁目壹番地」。本書に作者の久保田彦作の名は記されていない。

初出は「かなよみ」(明治十年十二月十日から十一年一月十日)に連載。その後、美麗な装訂を施された明治期草双紙『鳥追阿松海上新話』(全三編九冊、假名垣魯文閱、久保田彦作、陽洲齋周延画、明治十一年二、三月刊、錦榮堂板)として再構成されて出された。毒婦ものの濫觴として位置付けられている。

以上、今年度蒐集した資料から魯文の記述を抄出して見たが、吉原細見以外は明治に入ってからのものである。滑稽本や実録種や画譜など多岐に渉るが、中でも歌舞伎関係の劇書が目立つ。尤も「歌舞伎新報」などを手掛けており、劇界との関係が強かったので当然ではある。一方、「閲」として魯文の名を明記するものが見られるが、この語の示す内容は一概には決められない。しかし、程度の差こそあれ、何等かの関与を示すものと考えられる。

今後、魯文の逸文の蒐集に努めて、何れ最終的なデータは整備出来次第しかるべき媒体で公開する予定である。

## 附記

本研究は大妻女子大学二〇二一年度戦略的個人研究費 (S2113) に拠る研究成果の一部である。

なお、本ジャーナルの入稿データとしては、日本の古典とりわけ縦書の舊漢字や舊假名遣いに拠る振仮名付の文章（漢文も含む）が真面まともに扱えなく、MS-Wordのファイルで、かつMS明朝フォントを使用したデータの投稿に限定されているために、本稿では止むを得ず漢字の字体はJISの範囲に置き換え、さらに設定が煩雑なルビは割愛した。

（受付日：二〇二二年六月二十四日、受理日：二〇二二年七月十五日）

高木 元（たかぎ げん）

現職：大妻女子大学文学部日本文学科教授

一九九〇年、東京都立大学大学院人文科学研究科博士課程（国文学専攻）単位修得満期退学。一九九四年、博士（文学）（東京都立大学）。

## Anecdotes of Robun

TAKAGI, Gen

Faculty of Humanities, Otsuma Women's University  
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

Key words : Kanagaki Robun , A Literary History of the Nineteenth Century, Donteï Robun

---

### Abstract

---

Research on Kanagaki Robun has focused on biographical study and research on so-called literature (novels). However, a large number of miscellaneous writings were never regarded as literature, and to clarify the whole picture of his work, research and collection of these non-literary texts is inevitable basic research. As a result, the history of Japanese literature, which has been divided into early modern and modern periods by the Meiji Restoration, should contribute to a comprehensive account of the nineteenth century.

---